

ネパールの林

— ガンタキの谷を中心に —

三 木 鼻

七八年の春、私はネパールでトレッキングをする機会を得た。そこでこの国について少し調べてみると、私のイメージはかなりまちがっていることがわかった。ネパールはただ地面が高いところという国ではなく、タライといわれる低海拔(二〇〇m)から幾つかの山地を越えて、しだいに高い部分へ移行していく。したがって緯度からしてわかるように、トラのいる熱帯から雪男のうろつくところまである。私たちが普通に通る雪と氷の何もないところまで、じつに様々な景観が見られる。

こうした中で私たちは、ネパールの中部のポカラからゴラパニ峠を越え、カリ・ガンダキ川をさかのぼるコースをとった。バナナの生育する暖かで雨の多いところから、インナーバレーと呼ばれる、寒冷で雨

の少ない地方までの旅となった。

▽ポカラ△

ポカラへと飛行機で向う。眼下に緑の麦田、冬枯山の牧草地、段々畑などが見られる。ポカラからの歩いての旅は、しだいにこの国の姿を私の頭の中にうかびあがらせてきた。ひとことではいえば、過度に利用された自然というものである。

きれいな街

翌日の出発までの間、ポカラの街を歩くことができた。いやにきれいな街という印象である。ゴミがないし、なんといつても道端に草ぼうぼうとしたところがない。すべてきれいに刈りこまれている、という感じである。これは関係の深いイギリスの躰のよさが伝わっているのか、あるいは、こ

の国のお国柄として公共の場所をきれいに利用するからだろうか、と思いつながら歩いていた。しかし昨日のカトマンズの街中を思えば、どうもそんなこともないようである。気づいてみれば、紙クズを落とすにもゴミになるほどの紙はないし、落ちていてもすぐひろわれて燃料に供されるので、ゴミというものにならないのである。

草ぼうぼうのところだが、街角のどこにもないというところについてわかるまでには、しばらく時間がかかった。この日、街の舗装道路を歩いていると、向うの方で道に落ちた牛の糞を手で集めている男がいる。一つ一つまるめては、もっていくのである。牛の糞といえば、空港からカトマンズへの道で、壁に牛の糞を張りつけ、乾かしている風景が見られた。「なるほどあれが牛の

糞を燃料にするというのか」と、ひとりで台点をしていた。それとこれを思いあわせてみると、この国が牧畜ということに深くかかわっているのではないか、という点に気がついた。

よく刈りこまれた道端だと思ったのは、要するに街をあらゆる側面から徘徊する家畜たちがすつかり食いつくしてしまった跡なのである。それゆえ、地面に張りついて、家畜の口からのがれた植物しか生えていないというわけである。私のノートにスゲヤイネ科の植物、オオボコの間と記されている。いまは乾季であり、生育する植物も少ないのだから、家畜たちが多い以上、夏でも同じ光景となっているだろう。

ポカラから出発

マルデイ・コーラ川にそって同じように



家畜たちによって、すっかり食いつくされた街道を進む。乾季もそろそろ終わるか、家畜の食害を免がれた灌木が黄色の花をつけていた。地面に張りついて四〇五センチしかない。葉も小さく、花ばかりが目につく。モクセイ科のものようであった。このほかにも、リンドウやマメの仲間の花が見られた。いずれも背のひくい家畜の口から逃れ、地面に張りついたものばかりであった。

ヒエンザあたりを過ぎると、このあたりの土地利用の仕方が少しずつわかってきた。街道のある氾濫原は水田に利用され、山脚の緩傾斜の部分は畑のようである。この上に人家があり、裏は牧草地となる。さらにその上は林である。まだ充分に茂っていないのか、なんだか緑のうすい、木の少ない林に見える。どうも、この中にも家畜がはなされていらしい。林の上の高い部分も放牧地にされている場合がある。

刈り込まれた木々

やがてそうした林を間近に見ることになった。街道はマルディ・コーラから林をぬけて段々畑のある部落へと入っていく。山の利用できる斜面という斜面は、耕地化されている。そのかさなりは、山の斜面に逆らうことなく積みかさねられている。ポール紙を切り抜いて作る地形の立体模型とい

うところだ。畑には家畜が入らないように低い石垣がめぐらされ、街道はその間を縫っていく。

畑の中に、きれいに刈り込まれた木が立っている。太い枝と、そこから萌芽している枝の多くついた樹型をしている。家畜のために刈りとられたのである。

きのう夕方、ボカラの街で女たちが葉のついた枝をたくさん背負って歩いているのに出あった。そのあとを牛たちがのろろとついていっていた。そして、これが家畜のためのものということがわかった。私の感覚からすれば、木の葉っぱを飼料にするということとは、どうも考えにくいことである。一般的にいえば、家畜は草を食うものだし、草をやるものである。放牧地で家畜が気まぐれに木の葉を食うのはわかるが、餌箱に木の葉を入れるのは驚きであった。

利用できる土地はすっかり利用していると思われるこのあたりの風景、人間や家畜の増加は一方的な土地の収奪につながる。ここで化学肥料などの近代農法でそれに対応するならば、それもこの貧しい国では不可能である。とすれば利用できるものはあまざす利用しようということになってくる。最初は長い草もあり、これを刈りと利用することもできたであろうが、毎年幾度となく繰り返し返される利用に、長い草は

絶え、短い草にとつてかわられるようになる。そうすると、草に替って木の葉の利用が考えられた。しかし、これも数度の繰り返しは、しだいに萌芽量をおとしてくるものである（畑の中の木は、周辺の林からの採集では不足し、手がおよんできたものと思われる）。

このように、自然の回復力を越えた一方的な採集利用はますます地力を低下させ、大地を荒廃へと導く（別項でも述べるが）。この飼料は糞となって、肥料へと通じていく問題である。畑以外の土地から生産される有機物がすべて畑に投入されることになっている以上、生産を上げるため多くの肥料を入れようとすると、それだけ畑周辺の林を荒すことになる。このように荒れた林をしばらくの間、見つけられることとなった。

雲霧林

旅をつづけ、ガンダキ河への峠・ゴラパニの森にさしかかる。ここではじめて森らしい森を見る。ここは標高が二〇〇〇メートル以上あり、寒冷のため耕作に適さないのか、森林が残されてきたようである。カシの木やシャクナゲ、クスノキの仲間が見える。針葉樹はツガやイチイの仲間が見られた。林内は薄暗く、木々には厚く苔がつき、それが長くたれ下がっている。着生

のランも、苔の中にもまれてついている。こうした森を雲霧林というそうで、苔の生育をみてわかるように、モンスーン季にはかなりの多湿となる。またその頃は、ヒルの猖獗する林となるということである。

茂る有毒植物

この森の中に二〜三軒の家しかない、ナヤタンティという部落に泊った。そこであたりを歩いてみると、よく自然状態を残していると思ったこの森でも、かなりの人手が入っていることに気がついた。この部落や付近の森の林床に茂っている灌木は、家畜にとって有毒なアセビやジンチョウゲなどの植物ばかりである。これは、ここを通り過ぎる羊の群などが食べられるものを、すべて食べつくした結果なのである。

奈良公園の春日大社あたりのアセビ林は鹿の絶えない採食によるものだといのと同じである。アセビは馬酔木と書くように、鹿にとつても有毒植物だからである。ネパールの紙はジンチョウゲからつくると読んだような気もするが、案外こうしたことでこの木が多く、採集が容易だからかもしれない。

採れなかった石川先生の杖
この林で書き落とせないもう一つのこと
は、石楠木のことであろう。石楠木は北海道にもいたるところにあるので、その大き

さはご想像いただけるものと思う。まあ、大きくても床柱ぐらいいものである。ところが、このゴラパニには、巨大な石楠木の木がたくさんある。胸高で六〇センチクラスというのは、ざらである。こうなると、太すぎて残念ながら床柱には向かない。花の色は赤とピンクで、赤い花は澄みきったネパールの空気中で胸にしみいるものがあつた。

協会の会長のために、ジャクナゲの杖を送ることになった。そう思つて林内をよく見たが、林床にはさつぱりと手頃なものがない。これだけ親木がありながら、妙なことだと思つていたら、手頃なのは、どうも人間が薪や用材に持つていったようだ。大きな石楠木の方は、堅い木なので伐りたおすのに骨がおれ、人々が利用しないで残つてゐるという。それから、家畜の踏みつけも、せつかく出た芽を踏み荒してしまふことになるだろう。

どうも一方的に、人間のかかりあいによる森林の破壊という視点で話を進めすぎるとかもしれない。ある一斉林において、上層と同じ樹種のものが、中層や下層に多く出るといふのは稀なことである。これは北海道でもよく観察される。この石楠木林についても、同様のことであるとも思われる。しかし人々がここから薪や用材をとり

林床の杞物も家畜の影響を大きくうけてゐることを考えあわせれば、どうしても人間臭さというものをぬぐいきれないのである。

広がるはげ山

峠の茶屋で茶を飲む。昔のようにチベットのネパールを往復する大きなロボの隊商は少なくなつたが、反面、われわれのようなトレッカーが増えてきた。彼らのための新しいホテルが目についた。

その昔、ヘリコプターが利用されなかつた頃、日本アルプスの山小屋周辺の木は、小屋の建設や炊事、暖房のためにさかんに伐られた。これと同じことが、このゴラパニでも進んで行きそうだ。プロパンガスの利用などにより、これをくいとめることができるが、この山の中では当分考えられない。木は伐られるばかりで、はげ山化が進むものと思われた。

タトパニの山姥

ゴラパニから下ること一日、カリガンダキ川にいたる。さらに氷河の濁つた水を集めるこの川にそつて廻る。ガンダキ唯一の温泉場・タトパニにいたる。

夜、飯を食いながらふと両側にせまる山を見ると、ずっと上の尾根が山火事である。火は、しだいに下の方へおりてきてゐる。しかしあまりの距離に、とても火は消

せそうにない。夜空にひるがるこのきれいな風景を見てみると、この意味がようやくわかつた。これは山火事にあらず、山焼きの火である。新しい草のための牧野への火入れであり、藪を焼きつくしての新しい放牧地の拡大かもしれない。ゴラパニ峠の手前で見えていた黒い色の禿山の意味が、ようやくここでわかつた。放牧地が山焼きの管理を受けていたのである。

夜空に延々と燃えた山焼きも、次の朝にはすっかり消え、黒々とした山肌だけが残つた。この山焼きの跡はこの先しばらくの間いくつかが見られた。この火入れの森林に対する影響は、はかり知れないものがある。林をせばめ、再生しようとする森を燃やしてしまうのである。

この山焼きも、もつと北の乾燥地に入ると草もなくなり、見られなくなつてしまつた。

▼ガサの松林へ

ガサの村に近づくにつれて、松の木が多くなりはじめた。ブータンマツである。葉の長さや柔らかさ、球果の長いところなどストローブマツに似ている。ガサの村はずれには、きれいな松林が見られた。

松の利用

一般建築材への利用が一番多い、これは当然のことであろう。このあたりからの建

築の特徴は、屋根が平らになつてゐることである。気候が乾燥したものになり、屋根に傾斜をつけ雨を逃がしてやるほどの雨量がないためである。尾根や壁は土と石でつくられ、相当厚くなつてゐる。夏の暑さや冬の暖房の熱を逃がさないという断熱効果のためと、少量の雨は吸収されて雨もりしないようにという効果もありそうである。この厚い屋根を支えるために、たくさん松材を必要とする。

この平な屋根は、作業をしたり物を乾かしたりする場所になる。屋根に上るための梯子も太い松でつくられる。

肥料にされる松葉

それから、松葉が肥料源となつてゐるようである。燃料としては、用いていないようだ。堆肥といへば、ワラなどの草で作るものという、頭のある私にとって驚きであつた。草を刈るにも、まわりの山々はすっかり家畜に食われてないのである。畑の麦ワラで作ることはもちろんのことであるが、それだけではたらず、この松葉が利用され、それが重要な肥料源の一つとなつてゐる。

街道にそつた家の前に、多量の松葉が集められ、これが街道に敷いてあつた。どこでもそうとはいえないけれど、ガサの街まで数軒みることができた。木の止めをつ

けて松葉が広がらないようにもしてある。街道を通る馬やロバが落とす糞をキャッチしようというものらしい。有機物をできるだけ集めて畑に入れようという姿の一つであらう。このほかにも松葉は、敷ワラのように使われ、これらのものは何日か敷いたあと、どこかに積みなおしてたくわえて畑に入れられる。

針葉樹の葉っぱというと、ポドゾルという悪い土壌のことが思いだされ、これを使うことに驚かされる。乾燥地のここではさして問題にならないのだから、さらにこの奥に行くと、松はすっかり伐られてなくなり、かわりに、緑のままのビヤクシンの葉を使う。家畜を入れておく囲いの中に、摘みとってきた葉が入れられてあつた。

肥料には全く苦労している。この先のジ ョムソンの街では、子供たちが街はずれでヤギの糞をザルに集めていた。これも肥料とするのであらう。ここではもう草は見られず、石ころだらけの地面に刺だらけの灌木が地面をおおっているだけである。

松林の管理

ガサの村はずれに、きれいな松林がある。枯れた草原の中に松が点々とあるまわりの風景とはちがっているので、目を引かれた。中に入ってみると、天然更新による林だとわかった。数本の親木を残しておき

種が落ちて芽ばえ、林ができてくると親木も伐って利用してしまうのである。

いままで見てきたように、このあたりも一方的に利用され、取りつくされていく自然である。しかし村人の合意があれば、松林の再生利用が充分可能であることを、この林は示している。この地方で森林を再生させる要件は、「家畜から守る」ということである。それは草のための山焼きをやめることであり、出てきた苗木を踏みつけや採食から守るため、家畜を入れないことである。こういう点について、心づかいがあれば林を守っていけるのである。

さて、このガサの松林の松は、谷を吹きぬける強い風のため、枝が片枝になっている。それは、ラマとヒンズー教の聖地・ムクティナートへとなびいている。われわれもこの枝の示す方向にしたがって旅をつづけた。ダウラギリ(八、一六七m)をパツクにした松林をぬけると、ますます乾燥の度合が深まってくる。刺だらけの灌木がしだいに多くなってきた。

▼ジ ョムソンにて▲

話は一日飛んで、ツクチニからマーファにいたり、われわれが一週間、フライト待ちを余儀なくされたジ ョムソンにいたる。

身を守る植物

このあたりまでくると、すっかり乾燥地

の様相である。石ころだらけの地面に、背の低い植物がかたまりになって点在する。しかも、それらは、すべて家畜から身を守ることでできたものばかりである。夏はどれほどの草が出てくるか、興味深いところである。しかし、枯草のほとんどないところを見ると、ほんの少ししか生えてこないようである。

かたまりになっている灌木には三つのタイプにわけられそうである。一つは、きわめて刈り込みに強い植物で、無数の枝をくまにかえしくりかえし出して、堅い枝のかたまりになっている。ウグイスカグラの仲間のようにだった。そして、刺で武装しているもの。これが一番多く、高さ一メートルぐらいになるものから三〇センチぐらいで地面に広がっているものまで、数種あつた。

この中でもマメ科の仲間が一番多く見られた。また刺はつけないが、ちようどトクサのように全体の固いマオウの仲間も目につく。しかし、これは時として食われているものもある。いずれにしてもまだ乾季であり、葉っぱがでていないので、なんの仲間かを定めることはむずかしかった。

ようやく出かかってきたイネやスゲ以外の草本も、ヨモギ、セリの仲間で香りが強烈なものが多いように思われた。

刺だらけの灌木の中に、長い葉をしたイ

ネ科の植物が見られた。また家畜の歩けなような崖にも、長い草が残っていた。ここの植物が、いずれも家畜の口から身を守ることでできるもののみ、汎く繁茂できることを示している。

ジ ョムソンの林

ジ ョムソンは昔から、こんな刺だらけの灌木の茂るところだったのだろうか。ジ ョムソンから見えるニルギリ(七、〇六一m)の山の下には林があるのが見える。上から雪におおわれたところ、そしてそれに接してカバノキの林になり、それが松木に移っていくと観察される。この松林の幅は広い。しかし、この林も下ってくるにつれ木が少くなり、やがて刺だらけの灌木が点在する人間の住む地域へと移行していく。これがこの地の大まかな外観である。

ジ ョムソンの裏山に登ってシャング村の方を見ると数本の大きなビヤクシンの木が残っている。コンパ(寺)の近くにあり、石垣で囲まれたものらしい。このことから、人間の住んでいるあたりには、ビヤクシンの林があつたと推測される。この林がしだいに伐られ、利用されつくしたところで、いまの刺だらけの荒野になったのだろう。

ジ ョムソンの谷間でも数本の大きなビヤ

クシンを見た。きれいに枝が切られ、枝が利用されたことを示していた。それからもう一つの発見は、太いこの木の根元がくすぶっていたことである。村人があまりの太さに木を伐り倒すことができないので根元でたき火をし、木に火をつけたようだ。火はくすぶりながらしだいに材を細らせていくので、細くなったところで伐ろうというものらしい。木は点在するだけなので山火事の心配もなく、一〜二日たったところで、とりこくるのであろう。

木を伐ってしまった跡をもう一つ見た。裏山に登っていると、中腹以上で高切りしたビヤクシンがたくさんのこっていた。高伐りしておいて、そこから出る枝や葉を利用しようという心づもりからであらうか、あるいは少しでも細い部分を伐ったためか、どちらであろう。これらが、ある高さまで登ってこないと見られないということ、その下の部分は根株までも掘って持って降りたと考えられる。まさに、根こそぎの利用である。ジ ヨムソンの林は、こうした状況の中で失われてしまったのであろう。

▼ムクティナートへ

荒廃する奥地

ある日、トレッカーが入ることのゆるさされている最後の地点、ムクティナートへの旅に出かけた。街道からの風景はますます

荒涼として松林も見られなくなってしまっ

た。木のない山肌のはつきりと見える風景を見ながら、ようやくのことでムクティナートを遠望できる坂の上まで来た。ここから谷間を見ると、放棄された畑とくすれた家が数軒見えた。おそらく、水量の不足で耕地を維持できなくなったものと思われる。まわりの山には一本の木も見えない。こんなことでは、灌漑用水はおろか、たきものさえも不足して行くことは明らかである。伐りつくし採りつくすばかりで、自然を管理する姿勢で接しない以上、この条件の悪い自然の中で、彼らに対する自然の回答はきびしい。

自然の回復力を超える自然の利用はどういうものかを、まざまざと見せつけてくれる風景である。

聖地ムクティナートも、この自然破壊の報復を受け、人間の住むことのゆるされなくなつたことを感ぜさせる。入口左側のラマ教の寺院は、すでに無人であった。入口には錠がかかっていたが、中をのぞくと屋根がぬげ落ちていた。この日の雪降りという天気か、一層この地をもの淋しく思わせただのかもしれない。しかし聖地にしては、もの淋しすぎる風景であった。

このあとも人々が去ってくずれた村をジ ヨムソン近くで、さらに二カ所見ることが

できた。

S

トレッキングの道すがらの様子を、木というものに主眼をおいて書き綴ってみた。しかもそれは、きわめてかつてに「人間の過度の利用により姿を変えた自然」という観点に立って書いた。どうも自然そのものを素直な目で見ていないのではないかと、という反省もしている。これは、いずれ出かけられる会員諸氏の新たな一文をもって訂正されるであろうことを期待する。誤解と偏見に満ちていると一言書いておかないと、私のようにふらりと歩いた者の印象記で、ネパールの自然はこういうものだと思じこまれてもこまるので書きそえる。

旅のもつとも印象深いことは、なんといっても一週間ものあいだ飛行機待ちをしていた、ジ ヨムソン周辺のことである。ここにいるいるとのべてきたように、自然に抗しないので、素直に生きている人々を見つけた。彼らは家を建てたり器物を作るのに木を伐り、また、ごはんを炊くことや暖房に周辺の木を伐り払っていった。

そうしているうちに、この本来、乾燥気候のガンダキの谷では森林は再生することなく、大地はしだいに砂漠化していった。彼らの生活の重要な部分を占める牧畜は、一層こうしたことに拍車をかけることとな

った。人々は自分たちの生活環境を自らの手で悪化させ、そこに生活できなくなると故郷をすてて、どこかへ移り住まなくてはならなくなった。こんな営みが、山ばかりの国だと思っていたネパールの田舎で行われていたのである。積極的に自然を維持管理していかうとしない彼らには、当然のことであろう。ラマ教の仏たちの思いのとおりにしたがうという考えでいるのであろうか。

この谷では医療の普及とともに、増々人口が増加していき、その急速な人口増加は急速な生活環境の悪化をもたらし、この谷から多くの人々を追いやつてしまつてあろう。耕地面積が支えることのできる範囲の人々と、急増する各国のトレッカー相手の観光業をなりわいとする人々だけが、ここで暮すことになりそうである。

自然保護の会誌だから書くわけではないけれども、こんな世界の片田舎でも自然の保護(維持管理)ということ、重要な問題なのである。よく考えられた利用の仕方が確立されていることが重要である。しかし適切な維持管理がなされない時、私たちもどこかへ立ち去らなくてはならない。私たちの持つている科学技術というものは、ただその時をだましましたし引き伸ばすだけのものではないだろうか。(三井物産林業社)